

江戸古文辞派の漢詩と唐詩

胡 正怡

江戸中期に荻生徂徠を始めとする古文辞派は明の古文辞派の影響を強く受け、「文は必ず秦漢、詩は必ず盛唐」という文学観を掲げ、一世を風靡した。一方、唐詩の言葉を強く意識するため、古文辞派の詩は、後世、唐詩の模倣であるとされ、高く評価されてこなかった。

しかし、唐詩を模倣する方法を強く意識する古文辞派は、実は『伊勢物語』など日本の古典を詩に読み込むことがある。本研究は、この一見して矛盾するような行いに注目し、古文辞派の詩に於ける和と漢という概念と、古文辞派の詩に反映される文学観を明らかにしたい。研究方法としては、『伊勢物語』を取り入れた古文辞派の詩を注釈的に検討し、具体的に日本の要素をどのように詩に取り入れられるかを考察することである。

古文辞派の杜若洲・墨水（八橋・隅田川）など『伊勢物語』に関係する名所を読む詩では、在原業平を描く際、「王孫」という表現を用い、杜若を表現する際に、春草という言葉を用いる。それについて調べると、王孫と春草という組み合わせは、古文辞派が重んじる唐詩では、離別の情を吟じる際によく使用されるものであり、更にもとを辿れば、元来『楚辞』招隠士「王孫游て帰らず、春草生ひて萋萋たり。」という一文を踏まえた表現である。古文辞派は業平と屈原の類似性に基づき、「王孫」と「春草」の表現を使用する際に、業平と屈原を重ねて理解しているのである。つまり古文辞派は、日本の古典である『伊勢物語』を典拠にしつつ、唐詩の表現を用い、さらにその表現のもととなった『楚辞』をも意識させる。そのような複雑な手法によって、詩に重層的意味をもたらしている。

このような複雑な手法が持つ意味を考えてみる際に、徂徠の弟子である太宰春台の随筆「独語」が一つの手かがりになりうる。「独語」に「詩と歌との道ばかり、詞の異なるのみにて、その趣全く同じ、人情同じき故なり」という徂徠の言葉からの引用が見られる。そのような文学観は17世紀後半成立し、盛んになった「和漢同情」という思想が背景にある。

和と漢の人情が同じならば、理論上、唐詩・楚辞の言葉を用いて「和」の心を十分に表現できる。また、人情を表現するための手段である模倣も、形式通りの漢の人情だけではなく、和の人情をも表現することが可能になる。『楚辞』と『伊勢物語』の類似性を見出し、『伊勢物語』を描写するとき『楚辞』の言葉を利用した古文辞派らの詩は、「和漢同情」の主張を実現しようとする試みであると本研究で指摘した。